

「それでも好き」

作
アシタ
リュウタロウ

「それでも好き」

作 アシタ リュウタロウ

登場人物

女 鈴木
男 木村

シーン1

夜の公園

ベンチに男と女が横並びに座って手を繋いでいる

女 「温かい」

男 鈴木さん

女 はい？

男 浮気の線引きって、どこからかな

女 え……、どうでしょう？手を、つないだら？

女が気づき、咄嗟に手を離す

女 「およそ10m」

男 ごめん

女 いえ、こちらこそ

男 ……

女 ……木村さん

男 ？

女 手をつないでもいいですか？

二人、目を合わせる

シーン2

二人は視線を外す

オフィス

二人はそれぞれ離れた場所に着く

女 「だいたい6m」

男 鈴木さん

女 「主任と私は、上司と部下です」

男 鈴木さん、いる？

固定電話が鳴り響く
女、受話器を取る

女「はい、営業二課わたくし鈴木です。上司は木村です。ここはオフィス。彼は私からだいたい9時、今は四ヶ月ぐらい前の話です。お客様。四ヶ月前です。お客様？お客様？」

男 鈴木さん？

女 はい？

男 誰？

女 わかりません。うんともすんとも

男 何、いたずら？

女 さあ

男 返答ないなら切っちゃえよ

女 はい

男 それから悪いけど至急、会議室へウチの班を集めてもらえます？

女 これからですか？

男 よろしく、鈴木さん

女 今夜奢りですよ？木村さん

男 よろしく、鈴木さん

女 ……「上司と、部下です。そう大きくはないオフィス。だいたい9時先のデスクで、主任は難しい顔をしています。何故、そんな顔をしているのか、ここからではわかりかねます」

男 今日、残業できる人…

女 「だいたいわかりました」

女、受話器を置く

シーン 3

お料理屋

二人は向かい合わせに座っている

女 「約80cm」

男 (携帯電話を見る)

女 「主任と私は、残業後でも、上司と部下です」

男 (手が止まっている)

女 (それ見て)「上司は残業後でも難しい顔をしています。何故、そんな顔をしているのか、約80cmからでは、わかりかねます。」

男 (視線に気づいて) …ウチのだよ

女 「だいたいわかりました」

男 (視線を戻して) 好きな選べよ

女 「約80cmむこう側では、主任は奥様にメールをしています。机を挟んだこの約80cm向こうではどんな夫婦のやりとりがあるのでしょうか。」

男 選んだ？

女 「約80cm、こちら側ではわかりかねます」

男 え？

女 あ、よかったですか？お時間

男 ん？ああ大丈夫大丈夫。鈴木さんも終電大丈夫？

女 ええ、私は。歩いて帰れる距離なので大丈夫です

男 …あそ

女 選びました？

男 生中。あ、お酒飲める人？

女 奢って頂けるなら飲む人です

男 じゃあ飲めない人なんだ

女 飲むと素直な良い部下ですよ

男 だから普段は駄目なんだ

女 すいませーんっ。生2つ

男 あと枝豆

二人は乾杯をする

女 「約80cm、一杯、飲んで、顔が熱くなります。私は、お酒に弱いです。一杯、飲むにつれ、私は主任の話よりも、主任の難しい顔が気になりました一杯、飲むにつれ主任と奥様の夫婦のやりとりが気になり一杯飲むにつれて私は結婚してないですが夫婦のやりとりがそんな難しい顔でやりとりしなければいけないやりとりならばそんな夫婦やめてしまっって主任はもっというばい素敵な奥様と夫婦のやりとりをやりとりしてもらえたらいいなと思いますやりとり」

女は徐々に呂律が回らないように喋り続けている

男は何かをずっと喋っているように見えるが、声は聞こえない

シーン4

夜の公園

ベンチに男と女が、横並びに座って手を繋いでいる

女 「温かい」

男 鈴木さん

女 はい？

男 浮気の線引きって、どこからかな

女 え……、手をつないだら？

手を離す

女 「この時、私の手がおよそ1cm、の所で止まったのは、」

男 「浮気の線引きって、どこからかな」

女 「なんて、臭いセリフを吐いた、彼の顔が、いつもの難しい顔ではなく、照れながらも、男

の顔をしていたからで、」

また、手を繋いでいる

女 「この時、たしか彼の手は温かくて、この時、酔っていた彼と私は、酔っていた男と部下で、」
男 浮気の線引ききって、どこからかな

女 ……え、手を、「つないだら？」と聞いた時、彼の顔が上司の顔じゃなかったので、」

手を離す

女 「わたしは彼の手からおよそ10cm、の所で手を止めてみました」

男 ごめん

女 え、いえ…「こちらこそ」

男 ……

女 「どこを見ているのでしょうか」

男 「ごめん」

女 「と、言う前に、私の目を見ろ木村」

男 ……ごめん

女 え、いえ…「こちらこそ」

男 ……

女 「何を黙る木村。およそ10cm、体温を感じる距離に手を維持するのはつらいのだ」

男 ごめん

女 え、いえ…コチラコン

間

女 ……木村さん

男 ?

女 手をつないでもいいですか？

男、手をつなぐ

女 「チョロいなー、と思いました。彼と私は、いっぱいお酒を飲んで気も大きくなっていました
とでしょう。私は約80cm先で難しい顔をした主任を、チョロいなー、と思いました。い
っぱいお酒を飲んで訳も分からなくなっていたからでしょう。私は彼の事が少し可愛く
思いました」

シーン5

オフィス

女 「だいたい6m」

固定電話が鳴り響く
女、受話器を取る

女 「はい、営業二課わたくし鈴木です。ええ。ここはオフィス。主任と私は、上司と部下です。ここから彼まで、だいたい6mです。」

男 鈴木さん、鈴木さん

女 「お客様。只今チヨロいなーと思ったあの日から、二ヶ月くらい経ちました。ここはオフィス。私から彼まで、だいたい6m」

男 鈴木さん、いる？

女 「お客様。私、伴侶のいる男と関係を持ちました。初めは手を繋いで帰りました。その次は会社の裏で口付け、この前は私の部屋で身体を重ねました。私、わりと楽しいです。本気って訳じゃないんです。幸せな結果には決してならないし。でも、生真面目な上司が、ちよつとした気の迷いで、私と関係を持つてくれたんです。なんだかお互いに、お互いの足りない部分を、補っている、みたいな。なんだか私、どんどん彼の事が愛おしく思えてきました。お客様、聞いてます？お客様？お客様？」

男 鈴木さん

女 はい

男 誰？

女 無言電話です（受話器を置き）

男 また？最近多いね

女 ええ……

男 あ、悪いけど急ぎでリスト化してもらいたいデータがあるんだけど

女 ……

男 いいかな？鈴木さん

女 ……また奢りで

男 うん、よろしく鈴木さん

女 「上司と、部下です。そう大きくはないオフィス。だいたい9m先のデスク。ここでは、私と彼は、上司と部下です。だいたい9m先が近いのか遠いのか、今ではよくわかりません」

シーン6

二人はエレベーターに乗っている

女 「エレベーターでも、上司と部下です」

男 ……

女 「彼には、奥様がいます。彼は、奥様と愛を誓っています。彼と奥様は、夫婦です。夫婦は、いついかなる時も、真心を尽くすことを誓います。私の手を握ったこの指に、この指輪に誓っています。彼は私の事を、どう捉えているんでしょう」

二人は、エレベーターから降りる

男 お疲れ様

女 「会社が終わっても、私と彼は、上司と部下です」

男 ……鈴木さん？

女 はい？

男 お疲れ様

女 ……お疲れ様、です

二人は別々に歩き去る

女は、スマホを触る

女 『お疲れ様でした』
男 『既読』『お疲れ様』
女 『既読』『この間帰りが遅くなり、奥様にも大変ご迷惑をお掛けいたしました。』
男 『既読』
女 『どうぞよろしくお伝え下さいませ。』
男 『既読』
女 ……『今度、買い物いきませんか？』
男 『既読』『いいよ。何買いたい？』
女 『既読』『食器』
男 『既読』『食器？』
女 『既読』『男物の食器です』
男 『既読』
女 『ウチ、食器が少なくて、木村さん来た時にお料理作れないんです』
男 『既読』『わかった』
女 『既読』
男 『どこに行こうか』
女 『既読』
男 『誰にも見つからない所じゃないとね』
女 『既読』『そうですね』
男 『既読』
女 ……『買い物嫌ですか』
男 『既読』『全然。どうして』
女 『既読』『ううん。なんでもありません』
男 『既読』『うん』
女 『既読』『略奪でもありません』
男 『既読』『うん？』
女 『既読』『センチンス スプリング』
男 『既読』『どうした急に』
女 『既読』『なんでもありません』
男 『既読』『じゃあ、また』
女 『既読』「……チョロいなー、と思ってました。…『スタンプ』っと」

シーン7

一人は身体を密着させている
鈴木さんの部屋

女 「温かい」
男 ……
女 (小さく欠伸)
男 つまらない？

女 ううん。

……

女 「つまらない映画、でした。白黒の、外国人が、コーヒー飲んで、タバコ吸って、ダサイ台詞でおしゃべりして、それだけ。つまらない映画を、私と彼、は見ていました。仕事と偽って、つまらない映画を見る、休日。口元が、緩む」

……

男 ……
女 (小さく微笑む)

男 つまらない？

女 えっ、ううん。

……

女 「男の『今度の休日も仕事だ』は、だいたいが嘘ですそんなもの。…彼は私の部屋で、私と触れ合う。温かい。彼と私は、男と女です。」

男 え、何？

女 え？

男 何か言った？

女 や、別に

男 そう。ごめん、つまらなかった？

女 えっ、ううん。お洒落な映画、ですね。

女は一度立ち上がり、うろろうろする

女 「つまらない映画、でした。つまらない映画を、私と彼、は見ていました。仕事と偽って、つまらない映画を見て、欠伸をして、おしゃべりして、そして触れ合う」

……

女 「だいたい6mから、約80cm、たまに、およそ1cm、そして温かい彼の体に触れ、なかった様にバイバイして、オフィスでだいたい6mくらいの再会を繰り返す」

女は男に抱きつき、二人は戯れ合っているように見える

男の携帯から着信音

男 (携帯を見る)

女 「触れ合っています」

男 (携帯を見る)

女 「携帯、ではなく体を合わせている私をみて欲しい」

男 ウチのだよ

女 「彼と私は、上司と部下で、男と女だ。休日も仕事、休日も仕事、そうそうないですそんなもの。男の『今度の休日も仕事だ』は、だいたいが嘘ですそんなもの。彼と私はいま、触れ合っています。彼と私は、男と女だ」

男 『既読』

女 「こんなに近くにいるのに、こんなに近くにいるこの人が何を考えているのかわからない。わかっていてことなんて一度もないのかもしれない。ムカつく。チョロいなーって思っていたこの男との距離を計り兼ねている。ムカつく。おい。何考えてる木村」

男 ねえ、いま何考えてる？
女 えっ
男 いや、むずかしい顔をしていたから
女 ……いえ、なにも、考えていませんでした
男 そう。…ごめん、つまらなかつた？
女 えっ、ううん。お洒落な映画、ですね
男 セリフダサいけど好きなんだ
女 うん。私も
男 嫌にならない
女 映画？
男 この関係
女 ……どういう事？
男 辛い気持ちにさせているよね
女 ……
男 ごめん
女 ……
男 本当は別れてほしい？
女 ……
男 ……なんか言えよ
女 ……

短い間

男 (同時に) 鈴木さん
女 (同時に) 木村さん
男 え、
女 あ、(手で先を譲り)
男 あ…、明日、遅刻しないでね
女 ……
男 朝礼の当番、君だから
女 ……はい
男 ……えっと、(話を待つ)
女 ……(言わない)
男 (から) ……じゃあ、そろそろ、
女 「死ね、木村」

男はそこから離れる歩き続ける

女 「チヨロいなー、と思っていた。上司だった彼が、照れた顔を覗かせた時はチヨロいなー、
と思っていた、のに」

二人、携帯を持つ

女 「木村さん」

男 『既読』 「どうしたの？」

女 『既読』 「今日、来てくれてありがとう」

男 『既読』 「いや、変な事言っただけ。また今度、買い物いこうね」

女 『既読』 「お家、大丈夫？」

男 『既読』 「どういう事？」

女 『既読』 「奥さんからでしょう？何か、あった？」

男 『既読』

女 ……

男 『大丈夫。心配させてごめんね』

女 『既読』

男 ……

女 『私じゃダメですか』

男 『既読』 『どうした？大丈夫？』

女 『既読』 『奥さんじゃなくて、私じゃダメですか』

男 『既読』 ……

女 ……

男 ……

女 …… 「既読したんなら、返信してほしい」

男 ……

女 『ごめんなさい』

男 『既読』

女 …… 『ごめんなさい。忘れてください』

男 『既読』

女 …… 「既読したんなら、返信しろ木村」

シーン 8

オフィス

固定電話が鳴り響く

女、受話器を取る

女

「これが木村と私のこれまでの経緯です奥様。木村の奥様ですよ？ただいま木村はオフィスのだいたい『先に』デスクの上でお仕事をなさっています。本日も残業と嘘をついて私の、私は鈴木と申します。本日も木村は残業と嘘をついて私を部屋まで送ってくれます。もちろん優しい彼は奥様を気遣って長居は致しません。きつと今夜も口づけだけの不倫と予想されます。ご存知ですよ奥様。彼の唇が冷たい事。ご存知ない？え？ご存知ない？どうして？奥様なのに？彼にもっとも近いあなた？どうして？ご存知ですか？彼の唇が冷たい事を。身体はあんなに温かいのに。私、思うんです。彼の唇が冷たいのは奥様の、(言い直して)奥様のお料理が冷めているからじゃないですか？きつと私だったら彼の唇が冷たくなるお料理を作るような事はしらないと思うんですよ？彼がむずかしい顔をする様なやりとりをしないとと思うんですよ。失礼ですけど奥様は木村に真心を尽くしていらっしやいますか？聞いていますか奥様？奥様？奥様？」

鈴木さん？

女

……

男 鈴木さん大丈夫？
女 ……大丈夫です。いつもの無言電話ですから
男 そう
女 ええ「まだ大丈夫です。でも大丈夫じゃなかったら、私は奥様に何と言っているのやら」

女、受話器を置く

女 「あなたになんて言えばいいのやら」

シーン9

エレベーター

男 鈴木さん
女 ……はい
男 ……
女 木村さん？
男 子供ができたんだ
女 ……
男 ごめん

シーン10

二人っきりの場所

二人は向き合って座っている

女 「約80cmが、くら〜」
男 ごめん
女 え、あ……
男 ……ごめん
女 や……、ごめんない
男 鈴木さんが謝る事ないだろ
女 や、だって……
男 一方的で、本当に、悪い、な
女 ……おめでどうございます
男 『子供ができたんだ』
女 「と、彼は言いました。それはきっと奥様と、」
男 『子供ができた』
女 「の、でしょう。少なくとも私とではない事は確かなのだ」…おめでどうございます
男 ……え、
女 おめでどう、ございます
男 ……本当にごめん
女 何ヶ月ですか？
男 ……四ヶ月、
女 ……
男 ごめん

女 え、あ……
男 ……ごめん
女 や……、ごめんない
男 鈴木さんが謝る事ないだろ
女 や、だって……
男 一方的で、本当に、悪い、な
女 ……おめでどうございます
男 ……
女 「私は生きている限り何度もあなたの言葉が反芻されるんだろう。あなたの」
男 「ごめん」
女 「があなたと私の時間を否定している様に聞こえた。私は生きている限り何度もあなたとの記憶を反芻して、その度にあなたの」
男 「ごめん」
女 「その一言に胸を締め付けられ続けるだろう」
男 ……本当にごめん
女 何ヶ月ですか？
男 ……四ヶ月、
女 「四ヶ月前、には、私とあなたは、」
男 ごめん
女 「奥様が、…妊娠した。おかしい事は、なに一つもない」
男 ……ごめん
女 「謝られる事なんて、なに一つもない。でも、あなたと、その女を、殺したくなった」
男 ごめん
女 ……おめでどうございます
男 いや、
女 や…、ごめんなさい
男 鈴木さんが謝る事ないだろ
女 いえ、ごめんなさい
男 や、その、
女 「大した理由もなく好きになりました」ごめんなさい
男 ……
女 「大した根拠もないのに奥様より愛せると思っていました」ごめんなさい
男 鈴木さん
女 「途中から本気になっちゃいました」ごめんなさい
男 おい、やめろ
女 「チョロいからって舐めていました」ごめんなさい
男 おい、もう謝んな
女 なんて
男 どう考えたって俺が悪いだろ
女 それもそうですね
男 ……
女 じゃあ謝って下さい
男 謝るって……
女 頭を下げるんです。…ごめんなさい
男 もうそれやめろ
女 ねえ。悪いと思っていたら、謝ってください

